

【展覧会評】

「絵画のドレス | ドレスの絵画」

2021年2月13日(土)～2021年4月24日(土)¹⁾
東京富士美術館

国際ファッション専門職大学 河西瑛里子

18世紀から20世紀のドレスや衣装が描かれた90点以上の絵画。小説や映画、絵画をモチーフとし、本物のドレスや小物で創り出された13点の立体絵画。当時のファッションスタイルと生活を描いた12点の動く絵画(短編映画)。神戸ファッション美術館と東京富士美術館のコラボレーション企画として開催された本展は、両館のコレクションを結集し、3種類の「絵画」を展示するという異色の試みである。

会場では、以下の4つの時代のフランスを旅するような展示が披露されていた。

- 1 18世紀——貴族文化の興隆
- 2 19世紀前半
——フランス革命とナポレオンの台頭
- 3 19世紀後半——市民生活の発達
- 4 20世紀——服飾・絵画芸術の多様化

第一の18世紀はフランスで貴族文化が最盛期を迎えた時期である。1715年に絶対王政を確立したルイ14世が死去すると、それまでの抑圧的な雰囲気から解放されるように、貴族文化がますます華やかでいった。貴族たちの栄華は1789年のフランス革命まで続くことになる。おもに展示されているのは、マリー・アントワネットやボンパドゥール夫人も着ていたようなロココ期の衣装。女性のドレスは勿論、男性の宮廷服も、一緒に展示されている扇や時計、ソファも、ただひたすらに華麗である。

とくに印象的なのは、真ん中のソファに腰

かけた水色のローブ・ア・ラ・フランセーズを着た女性と、彼女の両脇に立つ、ピンクのローブ・ア・ラ・フランセーズを着た女性と、黒を基調としたシルクベルベットを着た男性。女性たちの白い髪は身長半分ほどまで高く結い上げられている(写真1)。それぞれの立体絵画には元になった絵画や映画があり、このロココ3人衆は映画「危険な関係」(1988年、監督スティーヴン・フリアーズ、配給ワーナーブラザーズ)に登場する3人である。



写真1 ソファにも注目したいロココ3人衆²⁾
(写真提供: 浜田久仁雄)

第二の19世紀前半は、王政が倒れ、ナポレオンが登場、失脚していった不安定な時代である。ドレスの流行は豪華なものから簡素なものへと移る。バドミントンを楽しむ女子たちが着ている、薄いモスリン生地のシュミーズ・ドレスはシンプルで、裾の長さが気になるものの、動きやすそうだ(写真2)。その他、ロマン主義の影響を受けて、裾やス



写真2 今にも動き出しそうなマネキンと、実際に動いている映像のコラボレーション
(写真提供：浜田久仁雄)



写真4 アール・ヌーヴォーの特徴と通じるレセプション・ドレス (写真提供：浜田久仁雄)



写真3 鏡の前に立つドレス姿の女性の絵画とマネキン、そして鏡の中の女性たちとのコラボレーション (写真提供：浜田久仁雄)



写真5 手前の左側がバレンシアガのドレス、右側がディオールのスーツ (写真提供：浜田久仁雄)

カートを膨らませたスタイルのドレスが取り入れられるようになった。このコーナーでもう1つ印象的なのは、2億円かけて復元されたナポレオンとその妻ジョゼフィーヌの戴冠式の際の大儀礼服だ。この戴冠式の様子は『皇帝ナポレオン1世と皇后ジョゼフィーヌの戴冠式』（ジャック＝ルイ・ダヴィッド、1805-07年ごろ）の絵画でよく知られているが、衣装を着用したマネキンを見ていると、夫婦が絵画から抜け出してきたように見える。

第三の19世紀後半は、1852年にナポレオン3世が即位し、工業生産が飛躍的に発展し、市民生活が向上した時代である。衣料品が大量生産されるようになり、オートク

チュールの流れも確立された。釣鐘状のクリノリン・スタイルと呼ばれるスカートが流行し、直径2メートルを超えるものもあった。日常生活を送るには、非常に不便だっただろう。またスカートの後部の膨らみを強調したバスル・スタイルも生まれ、ウエディング・ドレス（写真3）やプロムナード・ドレス、アフタヌーン・ドレスに取り入れられた。

最後の20世紀は、アール・ヌーヴォー（写真4）、ジャポニスムなど異文化の取り入れ、ガブリエル・シャネルやクリスチャン・ディオールなどのデザイナーの台頭（写真5）、アンディ・ウォーホルなどによるポップ・アートの影響など、服飾においても、絵画においても多様化が進んだ時代だ。アンディ・ウォー

ホルのキャンベル・スूप缶がプリントされた不織布のペーパードレスの流行は長く続かなかったそうだが、今でも斬新なアイデアに思える。

本展において、興味深く感じたのは次の2点である。まず、衣装を着ているマネキンの存在だ。この会場にいるマネキンは各衣装に合わせて製作された1点もので、平均的な製作期間は半年、製作費500万円。このような展示方法は、世界的にも類を見ないとのことだ。私はそれまで、マネキンというのは衣装を立体的に見せるための道具ぐらいにしか思っていなかった。しかし、本展では自分と比べながら、当時の人々の身体のサイズを感じることができ、想像していたより、この当時のフランス人は小柄で華奢であったことに気づかされた。このような気づきは、原寸大の人物が描かれることは稀な絵画を通して得られることはほとんどないが、ドレスだけを見ていたとしても、とくに肩幅などは気づきにくいと思った。目鼻口がはっきり描かれていない8体のマネキンは、物や作品としての服の側面が強調されているようで、とくに印象に残った（ナポレオンとジョゼフィーヌの2体、20世紀の衣装を着けた6体³⁾。逆に目鼻口が明らかに描かれている場合、人が着るモノという、用途としての衣服がより強調されている気がした。顔が具体的か抽象的かで、衣装の見え方が変わってくるところが面白かった。

続いては、立つスポットによって、作品の見え方が異なるという事実である。1巡目、展示されている衣装や小物に近づいて、じっくり細部まで観察した際には、マネキンと視線が合わないような気がした。ショーウィンドーに立っているマネキンのような視線を感じない、つまりマネキンに見られている感覚がないのである。しかし2巡目に少し離れた位置から、作品全体を見るようにすると、絵画と立体絵画と動く絵画がよく見えて、ぴたりとあてはまるスポットがいくつか見つかり、そこに立つと3種の絵画が1つの絵画に見えてきた。その絵画は立体なのだが、ときに平面のように見え、視覚の錯覚のようでもあり、面白い体験であった。このスポットに立つと、マネキンの視線が他のマネキンや絵画の中の人物に向いているように思えた。だから、私とは視線が合わないと感じたのかもしれない。室内が互いに響きあう1つの絵画のように見えた。

3番目のコーナーに、エドゥアール・マネの『散歩』（1880年ごろ）、黒いプロムナード・ドレスを着た女性のマネキン、当時の散歩の光景の動画が展示されている箇所があった（写真6）。マネキンのドレスと同じ色の黒いスーツを着た監視員の女性が、マネの絵画の女性のように歩いた瞬間があり、現実の彼女と合わせて、4種の絵画のように見えた。

3番目のコーナーに、エドゥアール・マネの『散歩』（1880年ごろ）、黒いプロムナード・ドレスを着た女性のマネキン、当時の散歩の光景の動画が展示されている箇所があった（写真6）。マネキンのドレスと同じ色の黒いスーツを着た監視員の女性が、マネの絵画の女性のように歩いた瞬間があり、現実の彼女と合わせて、4種の絵画のように見えた。

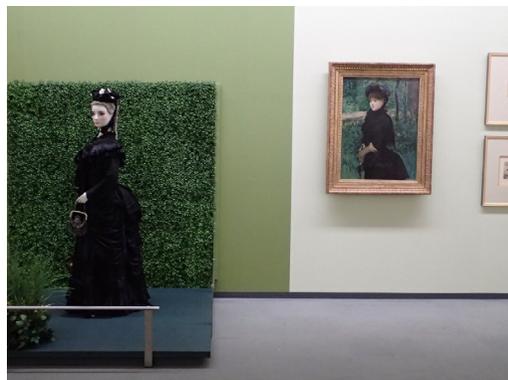


写真6 マネの絵画から抜け出してきたかのようなドレスを着たマネキン（写真提供：浜田久仁雄）

新型コロナウイルス感染症の流行拡大により、デジタル化が一気に加速したといわれるが、取って代わることができない領域もある。その場に行かないと大きさや質感を感じにくい衣装を扱うような展覧会は、その1つであろう。タイムマシンが発明されない限り、旅することができない、18世紀や19世紀のフランスの宮廷や上流階級の日常を、のぞき見しているような気分になれた1日だった。

<注>

- 1) 5月9日(日)まで開催予定だったが、東京都に発令された緊急事態宣言と政府からの要請を受け、会場が臨時休館となったため、終了が早まった。
- 2) 本稿中の写真のキャプションは筆者がつけている。
- 3) ナポレオンとジョゼフィーヌの場合、顔を世界中の人が知っていることと、着ている

衣装が他の作品とは異質だと知ってほしいため、20世紀の6体の場合、20世紀の人々は髪形などのバリエーションが無限であるため、1つに決めることが難しく、理想形のマネキンを制作した、とマネキンの制作者で、本展の企画・展示の中心となった、神戸ファッション美術館学芸員、浜田久仁雄氏から伺った(2021年2月14日、本人からの電子メールより)。